

平成の三十年 歌会始での天皇陛下御製

晴（平成二年）

父君を見舞ひて出づる晴れし日の宮居の道にもみぢばは照る

森（平成三年）

いにしへの人も守り来し日の本の森の栄えを共に願はむ

風（平成四年）

白樺の堅きつぼみのそよ風に揺るるを見つつ新年思ふ

空（平成五年）

外国の旅より帰る日の本の空赤くして富士の峯立つ

波（平成六年）

波立たぬ世を願ひつつ新しき年の始めを迎へ祝はむ

歌（平成七年）

人々の過しし様を思ひつつ歌の調べの流るるを聞く

苗（平成八年）

山荒れし戦の後の年々に苗木植ゑこし人のしのぼる

姿（平成九年）

うち続く田は豊かなる緑にて実る稲穂の姿うれしき

道（平成十年）

大学の来しかた示す展示見つつ国開けこし道を思ひぬ

青（平成十一年）

公害に耐へ来しもみの青葉茂りさやけき空にいよよのびゆく

時（平成十二年）

大いなる世界の動き始まりぬ父君のあと継ぎし時しも

草（平成十三年）

父母の愛でましし花思ひつつ我妹と那須の草原を行く

春（平成十四年）

園児らとたいさんぼくを植ゑにけり地震ゆりし島の春ふかみつ

町（平成十五年）

我が国の旅重ねきて思ふかな年経る毎に町はととのふ

幸（平成十六年）

人々の幸願ひつつ国の内めぐりきたりて十五年経つ

歩み（平成十七年）

戦なき世を歩みきて思ひ出づかの難き日を生きし人々

笑み（平成十八年）

トロンハイムの運河を行けば家々の窓より人ら笑みて手を振る

月（平成十九年）

務め終へ歩み速めて帰るみち月の光は白く照らせり

火（平成二十年）

炬火台に火は燃え盛り彼方なる林は秋の色を帯び初む

生（平成二十一年）

生きものの織りなして生くる様見つつ皇居に住みて十五年経ぬ

光（平成二十二年）

木漏れ日の光を受けて落ち葉敷く小道の真中草青みたり

葉（平成二十三年）

五十年の祝ひの年に共に蒔きし白樺の葉に暑き日の射す

岸（平成二十四年）

津波来し時の岸边は如何なりしと見下ろす海は青く静まる

立（平成二十五年）

万座毛に昔をしのび巡り行けば彼方恩納岳さやに立ちたり

静（平成二十六年）

慰靈碑の先に広がる水俣の海青くして静かなりけり

本（平成二十七年）

夕やみのせまる田に入り稔りたる稲の根本に鎌をあてがふ

人（平成二十八年）

戦ひにあまたの人の失せしとふ島緑にて海に横たふ

野（平成二十九年）

邯鄲の鳴く音聞かむと那須の野に集ひし夜をなつかしみ思ふ

語（平成三十年）

語りつつあしたの苑を歩み行けば林の中にきんらんの咲く

光（平成三十一年）

贈られしひまはりの種は生え揃ひ葉を広げゆく初夏の光に